

由利本荘市教育委員会

文化財の部門	有形文化財	文化財の種別	絵画
文化財の名称	せいえんがしゅうずびょうぶ 西園雅集図屏風		
品質構造員数	紙本金地着色 六曲屏風 一双		
作者及び法量	作者:牧野永昌(右隻)・牧野梅僊(仙)(左隻) 賛 浅香泰常 法量:(各隻)縦 174.0 cm×横 384.0 cm		
概要	西園雅集図は、中国の北宋時代、西園に文人墨客十六人が集い、文雅の集いを催し清遊をたのしんだという故事に因んだ作品である。この集いに参加した李公麟が「西園雅集図」を最初に描き、米芾が「西園雅集図記」という文章を記したと伝えられている。これが江戸後期の文人趣味の盛行に伴って人気の画題となり、日本でも多くの画家によりこの作品が描かれた。 本作品は、右隻には筆をとる蘇軾や李公麟が描かれ、左隻には阮という楽器を弾く陳景元や岩壁に詩を書こうとする米芾、竹林を背に語り合う円通大師と劉巨濟などの人物が描かれている。また、画面の上部には米芾の「西園雅集図記」の一部が江戸時代後期の書家浅香泰常によって記されている。 作者の牧野永昌(1747～1823)・梅僊(1778～1823)は、ともに本荘狩野派を代表する本荘藩のお抱絵師である。狩野派は江戸時代には幕府の絵師として全盛を極め、各大名も狩野派の絵師を抱える中、地方にも狩野派が広まった。本荘狩野派はこうした動向の中で牧野永昌に始まったといわれている。 本資料は法帖による伝聞や画譜を基に描かれたものであるが、西園の情景を彷彿とさせる秀作である。お抱絵師牧野永昌の円熟した技量と人物画に秀でた梅僊の旺盛な筆力が相まって仕上げられた代表的な合作である。 金箔を始め、群青や緑青などの高価な顔料を存分に使用した華麗な大画面は、藩主の求めに応じて描かれたことが推察される。江戸後期のお抱絵師の活躍を知ることができるとともに、「本荘狩野」「由利画人」などと称せられる独自性のある地域文化史を象徴する貴重な作品である。 本資料の右隻に「法橋永昌六十七歳」、左隻に「梅仙」と落款があることから、文化10(1813)年の作品であると考えられる。		
指 定 年 月 日	令和6年4月30日		
所 在 地	由利本荘市石脇字弁慶川5(由利本荘市本荘郷土資料館)		
所 有 者	由利本荘市教育委員会(由利本荘市西目町沼田字弁天前 40-61)		
管 理 者	由利本荘市教育委員会(由利本荘市西目町沼田字弁天前 40-61)		

西園雅集図屏風（右隻）



西園雅集図屏風（左隻）



浅香泰常賛

（右隻）其烏帽黄道服捉筆」書者為東坡先生仙桃巾紫」裘而坐觀者為王晋卿幅」巾青衣據方机而凝竚者」丹陽蔡天啓捉椅而視」者為李端叔後有女奴雲」鬟翠飾自然富貴風韻」乃晋卿之家姬也孤松盤」鬱上有凌霄纏絡紅緑相」間下有大石案陳設古器」瑤琴芭蕉圍繞坐石盤傍」道帽紫衣右手倚石」左手執卷而觀者為蘇子」由團巾繭衣手秉芭簞而」熟視者為黃魯直幅巾野褐」據橫卷畫淵明歸去來者」為李伯時披巾青服撫肩」而立者為晁無咎跪而捉石」觀畫者為張文潜道巾」青衣按膝而俯視者為鄭」靖老後有童子執靈」壽杖而立」泰常書

（左隻）二人坐於盤根古樹下」幅巾青衣袖手側聽者」為秦少游琴尾冠紫道」服摘阮者為陳碧虚唐」巾深衣昂首題石者為」米元章幅巾袖手而仰觀」者為王仲至前者鬚頭頑」童捧古硯而立後有錦石」橋竹逕繚繞於清溪深處」翠陰茂密中有袈裟坐」蒲团而說無生論者為」円通大師傍有幅巾褐衣」而諦聽者為劉巨濟二」人並坐於怪石之上下有激湍」湍流於大溪之中水石潺」湲風竹相吞爐煙方裊」草木自馨人間清曠」之樂不過於此嗟乎洵湧」於名利之域而不知退者豈」易得此耶」浅香泰常書（印）」

*（ ）は改行を表しています。